



明石市コミュニティ・スクールだより  
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

## コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU

明石市教育委員会事務局学校教育課

### 山口県に学ぶ No.4

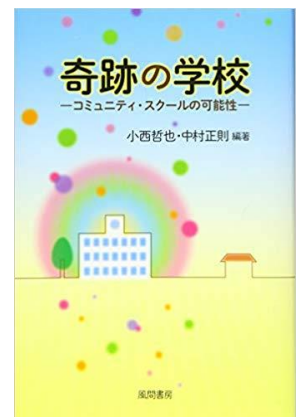
#### コミュニティ・スクールへの一歩

12月に入り、春にはきれいな花、秋には色づいた葉で、私たちの目を楽しませてくれていた樹々からは一気に葉が落ち、落ち葉が舞う季節となりました。通勤途中に近所の小学校の周辺道路で地面に落ちた葉を毎朝、竹ぼうきできれいに掃き集めてくれる高齢の男性の姿を目にします。その方は季節を問わず朝早くから学校周辺の道の清掃を続けられています。今朝もそうした姿を見ながら、「奇跡の学校」の中に、そうした清掃活動を始められた女性がきっかけとなりコミュニティ・スクールがスタートした学校の事例があったのを思い出しました。

T小学校の正面に住んでおられる70歳すぎのおばあちゃんは子どもたちが毎朝落ち葉を一生懸命に掃く子どもたちの姿を数十年にわたって見てこられたそうです。昔は交通量も少なく、安心してリビングから見守ることができたそうですが、交通量が増えるにしたがって、だんだんと心配になり、ある日決心したおばあちゃんは太陽が昇る前から落ち葉を掃き集められたそうです。そんな日が続く、子どもたちはだれがきれいにしてくれているのだろうと推理を始めたそうですが、はずかしがりやのおばあちゃんは子どもたちが登校する前に作業をすませ、その姿を確認することはできませんでした。ある日、近づいてくる台風に備え、いつもより早く出勤した教頭先生が、朝早くから作業するおばあちゃんの姿を目撃され、子どもたちのモヤモヤは一気に解決し、子どもたちはおばあちゃんにどのような恩返しができるか考え始めたそうです。そこで運動会に招待することになり、特別な招待状をつくり、子どもたちが届けたところ満面の笑みで受け取られたそうです。しかし、運動会当日、おばあちゃんの姿は見当たらず、心配していたところ1時間近くたってから、普段とは明らかに雰囲気の違いのおばあちゃんの姿が目に見え込んできたそうです。おばあちゃんは前日からワクワクして、なかなか寝付けず、朝早くから隣町のパーマ屋さんまで自転車で行って、10年ぶりに髪をセットしてこられたそうです。そんなおばあちゃんにもっと気軽に学校に立ち寄り子どもたちの様子を見守ってほしいことを伝えると、おばあちゃんは顔をくしゃくしゃにして「ずっとこの学校に来てみたいと思っていたのよ。できることは何でもお手伝いしますよ」と言うてくださったそうです。それが地域の方に学校に来ていただく第一歩となり、「子どもも大人もともに学び、ともに育つ学校づくり」が始まったそうです。おばあちゃんとのつながりが、社会に開く入り口だったのではと思います。(詳しくは「奇跡の学校」を)

コミュニティ・スクールづくりは決まった形があるのではなく、ちょっとしたことがヒントになるのかもしれませんが。そんなヒントは日常の中にいっぱいあるのではと思います。「学校を開く」という視点でみていくと、今まで気付かなかったことが見えてくるのかもしれません。

このT小学校のおばあちゃんも子どもたちのためにと考えて始めたことがいつのまにか自分にとっての生きがいになっていたのではと思います。毎朝竹ぼうきで清掃を続けておられる高齢の男性の方も、自分の生活の一部になっているのだと思います。他にも、気が付かないところで地域貢献をされている方もたくさんおられるのだと思います。そうした地域の日常に気づいてくことも学校を開き、コミュニティ・スクールへの一歩につながるのではと思います。



(参考文献：奇跡の学校)

# 地域活性 お年寄りとショット

12月5日（木）の朝日新聞の朝刊の記事です。

## 神戸北高生企画グラウンドゴルフ

神戸市北区唐櫃台にある県立神戸北高校の生徒たちが地域住民との交流をテーマにした授業を企画した。生徒と地元のお年寄りたちが幅広い年代で楽しめるグラウンドゴルフを通じて交流を深めた。来年度も実施して、多くの住民を巻き込みたい考えだ。



グラウンドゴルフをプレーする生徒たちと老友会のメンバー。11月6日、神戸市北区

### 「伝統になれば」

グラウンドゴルフを楽しんだ。メンバーの1人がボールインワンを決めると、生徒から大きな歓声が上がった。同コースでは毎年、3年生が授業の一環でスポーツ行事を企画している。学校の最寄り駅からの通学路に手すりが多い。コンビニが高齢者施設に変わった……。保健体育科の福本友貴教諭(33)が地域で高齢者が増えていくのを感じ、4月から生徒たちと話し合い、「地域が元気になる企画」を一掃に考えた。

地元で盛んなグラウンドゴルフに生徒たちが着目し、「唐櫃台を元気に」をテーマに地域住民を巻き込んだ企画を立案。熱中症対策やプレー中の接触防止など安全な運営をするために準備を進めたという。

先月6日のグラウンドゴルフに参加した老友会の向島健会長(80)は、「話をもらったときはびっくりした。続けるならもっと多くのメンバーが参加し、みんなで喜びを分かち合いたい」と話す。

企画のリーダーを務めた小郷大和さん(18)は「不安なこともあったけど、普段できない交流は楽しかった。今後、北高の伝統になれば」と語った。(足立優心)

盛んなグラウンドゴルフでの交流を計画し、実施されたという記事です。この記事を読んで、こうした取組のなかで学校が地域の学校になっていくのだろうなと思いました。そして、こうした取組が持続可能なカリキュラムとして定着していく仕組みがコミュニティ・スクールだと考えます。今まで距離があった生徒たちと地域住民が、「地域が元気になる」を合言葉にいろいろな企画していくことは、学校と地域の距離を縮めるだけでなく、生徒たちが社会の見方や社会とのつながりを考える生きた学びの場となるのではと思います。小学校や中学校と違って地域との距離があるように感じる高校ですが、一番社会に近いのは高校です。子どもたちは、小学校・中学校・高校とそれぞれの段階で地域とつながり、地域の中でたくさんの大人と触れ合うことで、子どもたち自身がキャリアアップし将来を真剣に考えるようになっていくのではと思います。小学校・中学校・高校とそれぞれの段階で子どもたちが地域の中でできるときにできることを行っている活動がでてきたらいいなと思っています。そんな取組が松が丘サミットで子どもたちの提案から始まろうとしています。

## コミュニティ・スクールをより理解するために



未来の学校づくり

コミュニティ・スクール導入で「地域とともにある学校」へ

木村直人 文部科学省大臣官房会計課

相田康弘 文部科学省総合教育政策局地域学習推進課

学事出版

この本は「今、なぜコミュニティ・スクールなの?」「今、なぜ地域とともにある学校なの?」の疑問に答えてくれ

ます。「学校を開く」という視点で読むと、学校が社会とつながる必要性や、「地域とともにある学校」への転換が未来の学校づくりにつながっていくことが見えてきます。

この本を読みながら、独立行政法人教職員支援機構の資料「「地域に開かれた学校」から「地域とともにある学校」へ」やオンライン講座校内研修シリーズ No.24 「「地域に開かれた学校」から「地域とともにある学校」へ」を合わせて活用されるとより理解が深まるのではと思います。

※資料（検索：地域とともにある学校 PDF）

※動画（検索：Youtube 地域とともにある学校）